

500
 経営編


550 淘汰

 551 淘汰更新と
 酪農経営

淘汰更新と酪農経営

～乳牛の淘汰更新が経営を左右する～

1. 最近の淘汰更新の状況

経営を発展させるためには、生乳生産に対して投下する資産を古いものから新しいものへ、経営に対する貢献度が弱くなったものから貢献度が期待できるものへと更新を図っていく必要がある。乳牛も同様で、計画的に淘汰更新を図っていくことは重要な経営活動である。

しかし、実際の淘汰更新を見ると、淘汰すべき牛ばかりではなく残したい牛までも更新が行われるケースが見られる。その最たる理由は疾病や事故による廃用である。

表1に北海道での牛群検定の除籍理由を整理した。これによると「死亡(突然死、伝染病等その他疾病によりと畜)」が26.2%と最も多く、次いで「その他(除籍理由不明)」25.4%、「繁殖障害」14.1%、「乳房炎」11.2%などとなっている。

経営の効率を考えた上での選抜淘汰対象となる「低能力」は4.7%と低く、疾病等の理由で廃用されることが多いのが現状である。また、除籍牛の43%は2産までの若い牛であり、突然の死亡や疾病等による廃用による経済的ダメージは非常に大きいと思われる。

表1 牛群検定の除籍理由(乳用売却除く)

	乳房炎	乳器障害	繁殖障害	肢蹄病	消化器病	起立不能	その他	低能力	死亡	計	構成比
未経産	496	95	588	193	42	238	2,058	81	5,421	9,212	8.9
1産	1,193	561	2,620	1,325	307	581	3,880	740	3,851	15,058	14.6
2産	2,260	722	3,405	1,677	406	796	5,065	988	4,832	20,151	19.5
3産以上	7,652	2,609	7,893	6,231	942	2,292	15,171	3,044	12,955	58,789	57.0
計	11,601	3,987	14,506	9,426	1,697	3,907	26,174	4,853	27,059	103,210	100.0
構成比	11.2	3.9	14.1	9.1	1.6	3.8	25.4	4.7	26.2	100.0	

出典:(公社)北海道酪農検定検査協会「検定成績表(牛群成績平均)2021年9月分 全道」より抜粋して作成

2. 淘汰更新率上昇による経済的影響

淘汰頭数が増加した場合、経営に対して次のような悪影響をもたらすことが考えられる。

- (1) 育成牛の多くを更新用としなければならない
- (2) 販売用育成牛頭数が減少する
- (3) 後継牛候補の選抜圧が低下する
- (4) 供用年数が短縮し、乳牛償却費が増大する
- (5) 乳牛処分損の発生

(1)について、各平均産次とするためには何%の淘汰更新率となるのか、また平均産次毎に頭数を維持するための保有育成牛は何頭かを以下の条件を用いて試算した。試算の条件は、① 成牛を全て自家産牛で賄うこと、② 経産牛 70 頭を維持することとした。

それによると、淘汰更新率が 50%を超えてくると成牛以上の育成牛頭数を保有しなければ牛群頭数が維持できなくなることがわかる。

表2 淘汰更新率と育成牛頭数

産次	淘汰更新率	保有育成牛頭数	総頭数
	%	頭	頭
2産	52	78	148
3産	33	49	119
4産	24	36	106
5産	19	28	98
6産	16	24	94
7産	13	19	89

注1)「農地の高度利用が乳牛資源の利用延長に及ぼす影響に関する調査研究」酪農総合研究所(2000年)より引用

注2)前提条件を経産牛70頭、初産分娩月齢26カ月、頭数規模は現状維持として試算した

3. 淘汰更新は計画的に

このように、淘汰更新率の上昇は経営を大きく左右することを認識しなければならない。ただし、淘汰更新率の上昇といっても、淘汰予定牛が多く、後継牛を十分に確保している状況にあって、乳牛の改良など明確な目的がある中での淘汰更新は一概にマイナスとは言えない。現に積極的に淘汰更新を進めることで牛群の改良を図り、高収益を実現する経営体もある。問題視しなければならないことは、同じ淘汰更新率の上昇であっても、疾病や事故によって牛乳生産の主力として供用しなければならない牛の淘汰更新が多くなった場合である。これによって群全体の生産性の低下はもちろん、前述したような後継牛の保有頭数の増加や選抜圧の低下など、経営を圧迫することにつながるからである。

では、安定した頭数維持のための淘汰更新率は何のラインに置くかについては表2より、経産牛頭数 70 頭の約半分を保有頭数とする 24%、約 1/4 が一つの目安になると思われる。

日頃の経営活動の中で、乳牛の淘汰更新を計画的に進めるため、また疾病や事故による廃用を少なくさせるために、酪農の基本となる乳牛の飼養管理技術を研鑽し、健康に飼養することが経営発展に重要である。